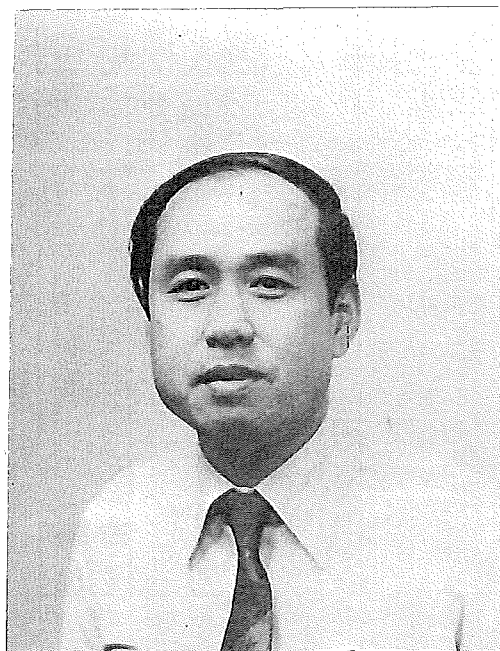


石黒 隆敏

(株) P E S 建築環境設計



いまの建築と設備の関係は、建築が設備を知らず、設備が建築を知らないもの、と指摘する。ひとつの建物の内と外とが協調しあわないでいいものなどではしない。P E S 建築環境設計は、建築設計とともに建築設備設計に大きなウェイトをおく事務所である。

この事務所の設備へのアプローチは、「設備をやめるにはどうしたらいいのか」という逆説的ともみえるところからはじまる。人工で快適さをつくりだす設備は、さまざまな機械をうんだ。個々の性能は日毎によくなる。しかし「電気がとまれば」一瞬にしてそれらは無用の長物になりさがる。だから、自然エネルギーを最大限利用し、そうでない部分を機械で補おうという考えだ。

石黒さんは昭和三十七年名工大卒。学生時代は、ダンスホールと喫茶店、テニスコートが生活の主要な三地点だったとか。卒業後一時

建築家名鑑

1980

社会に出、また名工大大学院に。大学院修士課程修了後、昭和四十三年から二年ほどニューヨークのシスカ・アンド・ヘネシー設備設計事務所にプロジェクト・エンジニアとして勤務。ここへは、はじめ紹介者はあったものの、実際に入社するにあたってはすべて自分で問いあわせ手続きもしたという。三五〇人もの所員を擁す設備に関してアメリカで一番大きいこの事務所は日本人は石黒さんひとりだった。所員の国籍も多様なところ。ここで、五十―六十階建の建物や、五十―六十年の長期プロジェクトなど、アメリカならではのスケールの大きい仕事にたずさわり、一緒に仕事をするのでさまざまな国の友人も得たという。

昭和四十七年四月、現在のP E S 建築環境設計を開設。いまでも外国の友人からはよく国際電話がはいり、こちらからもかける。いたった仕事の情報も直に仕入れられる。

アメリカでは事実だけをはっきりとつかむことを覚えたという。これはいい、これは悪いという判断を何事にも下さないと落ちつかない日本の思考とこれはいくらかちがう。「中学時分より好きな探偵小説の『犯人さがし』」のこれは延長でもあるそう。

目をしっかりとらえた、どこか軽妙なウィットを感じる話し方。本当はコンサルテーションの方をやりたいという石黒さんは、設備には特に見落とされがちなソフト面を考えることのできる人だ。

愛読書は、ギリシャ神話、毛沢東著作集、ダンテの神曲等。好奇心の強いユニークな積極派、四十一歳。